

青森県近代文学館報

特別展「大塚甲山没後一〇〇年展」開催

会期 平成二十三年七月十六日(土)～九月十一日(日)

青森県近代文学館では、七月十六日から九月十一日まで、特別展「大塚甲山没後一〇〇年展」を開催します。

一八八〇(明治十三)年、上北郡上野村(現東北町)に生まれた大塚甲山(本名壽助)は、三十余年の生涯のうち約千編の詩、一万句の俳句、二千四百余首の短歌を残しました。

甲山は十六才から俳句をはじめ、二十一才で『俳句選第一編』の選句を任されるなど明治三十年代に群を抜く活躍をしています。

また、明治三十一年田園詩風の新体詩人として出発した甲山は、明治三十七年に「新小説」に日露戦争を背景とする反戦詩「今はの写し多」をはじめ、



大塚甲山肖像



大塚甲山遺稿集

百四十五編の詩を発表し、森鷗外から詩集出版を想定した二首の歌を贈られるなど、高く評価されました。しかし詩集はならず、故郷に戻った甲山は、上北郡役所に勤めながら東奥日報「俳壇」の選者を務め、一九二一(明治四十四)年、三十一才で夭折します。甲山自身の手でまとめられ家族によって守られた詩稿が、「大塚甲山遺稿集」として世に出たのは、一九五七(昭和三十二)年。実に大塚甲山の死から四十六年後のことでした。本展は没後一〇〇年という節目の年にあたって、本県近代文学の夜明けを駆け抜けた大塚甲山の生涯とその業績に光をあてるものです。

目次

- ・特別展「大塚甲山没後一〇〇年展」開催……………1
- ・特別展「西北五文学散歩」開催の記録……………2
- ・追悼 三浦哲郎……………3
- ・新資料紹介 野脇中学校文芸部雑誌「白鳥」……………3
- ・白木茂生誕一〇〇年展に寄せて(鳥井登美子)……………4
- ・企画展「白木茂生誕一〇〇年展」開催報告……………5

平成二十三年企画展

□企画展「北村小松生誕一〇〇年展」

四月二十三日(土)～六月五日(日)

北村小松(現八戸市出身)は、慶応大在学中から小山内薫に師事し、劇作家として活躍。日本初の本格的トーキー映画「マダムと女房」のシナリオ作者として知られ、『限りなき鋪道』や『銀幕』など多くの小説を著したことで有名です。その著作や作品掲載誌を多数展示し、多彩な文学活動の魅力に迫ります。

□企画展「詩人・村次郎展」

十月八日(土)～十一月二十日(日)

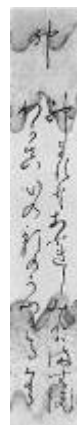
村次郎(現八戸市出身)は、慶応大在学中に詩誌「山の樹」「四季」等で活躍した詩人です。戦後、郷里で刊行した『忘魚の歌』『風の歌』以後は作品発表を絶ち、家業の旅館「石田家」に専念しますが、後輩文学者たちに多大な影響を与えました。全詩集刊行という節目にあたり、作品の全貌と生涯を概観します。

常設展示室展示替え

平成二十三年度春から以下の文学資料を新たに常設展示します。

- ・竹内俊吉生誕一一〇年展に寄せて(村田泉)……………6
- ・企画展「竹内俊吉生誕一一〇年展」開催報告……………7
- ・「新収蔵資料展 蘭繁之の世界」開催報告……………8
- ・第九回青森県近代文学館柳川大会……………8
- ・資料寄贈者紹介……………9～11
- ・ギャラリートーク、今月の作家「ナナ」、館務日誌……………12

◎陸羯南―短冊「神ますとあふぎしみればます鏡わが真心の影のうつれる」



◎富士幸次郎―書軸「人は其の理由の何たるやを知らざれ共その祖国を愛す」

◎寺山修司―原稿「外傷性記憶喪失(トローマティック・アムネージア)」

文学ビデオ

当館のAVブースで上映している文学ビデオに、四月から新たに「三八文学散歩」が加わります。

青森県の南東部に位置する三八地区。三戸は戦国時代に南部氏の拠点となつた地、八戸は江戸時代に藩が置かれ、城下町として栄えた地です。特色ある歴史的背景を備えたこの地域は、多彩な文学者を輩出し、また県内外の文人たちによって作品に多く描かれてきました。三八地区の魅力に迫る文学ビデオ。ホームページ上での公開も予定していますので、ぜひ御覧ください。

特別展「西北五文学散歩」開催の記録

会期 平成二十二年七月十日(土)～九月五日(日)

五所川原市、つがる市、北津軽郡の中泊町、板柳町、鶴田町、西津軽郡の鱈ヶ沢町、深浦町の二市五町で構成される「西北五」地区。七月十日から九月五日まで開催した特別展「西北五文学散歩」は、この地域の持つ豊かな文学的素材とその魅力を御紹介するものです。

開会式には、詩人の泉谷明氏、井上諭一弘前学院大学教授をお招きし、黒岩恭介青森県近代文学館館長とともにテープカットを行いました。

本展は、星野富一郎氏の研究に添って、各市町をそれぞれが描かれた作品と写真で紹介する文学散歩を柱に、西北五ゆかりの作家や文学活動の足跡、文学碑等を加えて構成したものです。



左から黒岩館長、泉谷明氏、井上諭一氏

文学散歩では、太宰治と長部日出雄を中心に、星野富一郎氏の解説に従って「第一景つがる市」から「第七景五所川原市」まで、谷崎潤一郎『颯風』、松本清張『風の視線』、司馬遼太郎『北のまほろば』などでできるだけ多くの作家と作品を紹介するものとなりました。

また、西北五の豊かな文学活動を示すものとして、五所川原の俳人成田千空、農民の苦しみを描いた平田小六、方言詩人の木村助男を取り上げるとともに、児童文学の鈴木喜代春をはじめ現在も活躍する多くの作家や、この地を訪れた与謝野晶子と板柳の人々との交流、和田山蘭と加藤東籬による蘭菊会の活動を紹介する資料なども展示しました。

図録は、太宰治の疎開時代を取り上げた鎌田慧氏「金木の文化運動」、西北五が輩出した詩人を紹介した泉谷明氏「西北五の詩と風土」、五所川原を訪れた若山牧水の歌を読み味わった梅内華子氏「若山牧水の旅の歌」、『句集 津軽』に詠まれた思いを語った辻桃子氏「鞆の南」の寄稿によって、西北五の文学と魅力に多角的に迫るものとなりました。

展示資料は、太宰治の初版本をはじめ図書、書軸、原稿、自筆資料等二百二十三点。期間中、県内外から約三七〇〇人に来館いただきました。

関連イベント

なべげん Presents リーディング・コラージュ 『シユウちゃんの知らない津軽 SEI HOKU GOI』 七月二十五日(日)

県総合社会教育センター、参加126名
企画制作 渡辺源四郎商店
構成・演出 工藤千夏

出演 畑澤聖悟・下山昭義ほか
このリーディング・コラージュは、青森市を本拠地に活動をする劇団渡辺源四郎商店による朗読劇です。

津軽三味線の「十三の砂山」にのって、畑澤聖悟・工藤由佳子・三上陽永による松本清張『風の視線』など十三の荒涼とした風景の朗読で幕が開きました。息つく間もなく、『津軽』、そして太宰治の数々の作品、アラン・ブーアの『津軽―失われゆく風景を探して―』、長部日出雄の『津軽空想旅行』など、西北五を描いた散文や詩歌が次々と繋がれ、一つの



ゲネプロ風景

ドラマとなっていくきます。やがて、西北五の変遷と様々な作品の断片が怒涛のように重なり合い、響き合った後、津島修治の綴り方「僕ノ町」と「津軽じよんがら節」の演奏で幕が下りました。

朗読劇という初めての試みでしたが、参加者の中には、高校生など若い方々をはじめ文学館のイベントに足を運ばれた方も多く、盛会の内に終わることができました。

第一回文学講座 八月八日(日)

県総合社会教育センター、参加40名
「俳句つて楽しい」句集『津軽』
辻桃子(俳誌「童子」主宰)
「詩のトポスとしての西北五地方」
高橋玖未子(詩誌「飾画」同人)

日曜講座 八月二十二日(日)

青森県立図書館研修室、参加14名
「それぞれの『津軽』」
飛内文代(青森県近代文学館室長)

第二回文学講座 八月二十九日(日)

県総合社会教育センター、参加68名
「青森県ゆかりの小説と小説家」
川、谷崎、松本清張、その他」
井上諭一(弘前学院大学教授)
「太宰治と文学の魅力」アンチ太宰校長、62歳からの学び」
木下巽(金木太宰会名誉会長)

(飛内文代、青森県近代文学館室長)

追悼・三浦哲郎

平成二十二年八月二十九日、作家三浦哲郎氏が七十九年の生涯を閉じられました。

三浦哲郎氏は、一九三一（昭和六）年、八戸市三日町に生まれました。

早稲田大学在学中に小説の習作をはじめ、仲間と同人雑誌「非情」を創刊。第三号に掲載した「遺書について」が機縁となって井伏鱒二の知遇を得、以後師事することになります。

一九六一（昭和三十六）年、「忍ぶ川」によって第四十四回芥川賞を受賞。自らの体験を純粋な抒情に昇華したこの作品は高い評価を得ました。青森県では現在に至るまで唯一の芥川賞受賞です。

以後も、野間文芸賞を受賞した『拳銃と十五の短篇』、日本文学大賞受賞の『少年讃歌』、大佛次郎賞受賞の『白夜を旅する人々』など、数多くの作品を書き続けました。短篇小説の能手としても名高く、短篇集（モザイク）シリーズの「じねんじょ」「みのむし」で二度の川端康成文学賞を受賞しています。また、芥川賞選考委員（昭和五十九年〜平成十七年）をはじめ、多くの文学賞の選考委員を務めました。

青森県近代文学館では、開館以来常設展示室「十三人の作家」の一人として紹介させていただくとともに、平成十二年には特別展「三浦哲郎芥川賞受

賞四十年記念展」を開催しました。

このたびの御逝去に際し、当館では、九月一日から三十日まで常設展示室内において「追悼・三浦哲郎」のコーナーを設けました。当館について書いていただいた原稿「渚の文学館」を展示するとともに、これまでの代表作や、青森県を舞台にした作品を紹介しました。

三浦哲郎氏の御冥福を心からお祈りいたします。



平成十一年十二月、新木場貯木場にて当館文学ビデオ『忍ぶ川』の舞台をたずねての撮影時
撮影・サトウユウジ

新資料紹介・野脇中学校文芸部雑誌「白鳥」

寺山修司が野脇中学校の三年生時代に、文芸部の仲間と刊行した文芸誌「白鳥」が、このたび、当時の同期生だった内山啓次郎・京子御夫妻から当館に寄贈されました。

文芸誌「白鳥」は、一九五〇（昭和二十五年）八月二十五日、野脇中学校文芸部の三年生によって刊行された雑誌です。

内山京子氏は当時の文芸部員の一人であり、「白鳥」に島谷京子の名で作品を発表しています。内山御夫妻は、この資料を六十年間大切に保管しておられました。

昭和二十四年、中学二年の時、寺山修司は三沢市から青森市の野脇中学校に転校してきました。すでに父親は戦死し、母親は福岡県のベースキャンプで働くことになったため、青森の大叔父夫婦に引き取られたのでした。「白鳥」刊行は、寺山が青森市に来て約一年が経った時期にあたります。

ガリ版刷りで四十八ページの「白鳥」には、野脇中学校文芸部二十二名、先生二名の詩・小説・短歌・俳句など二百三十五編が掲載されています。メンバーの中には、のちに青森高校でも文学仲間となる京武久美、東義方らの名前も見えます。

この創刊号に寺山は、全部で八十九編

（詩十編、小説三編、童話一編、短歌四十五首、俳句三十句）と、部員の中でも群を抜く数の作品を発表しました。巻頭の「創刊の辞」で部員を代表し「僕達が最も待望していた雑誌を僕達の手でとうとう仕上げました。」と喜びを述べています。巻末奥付では「編集人」として名を連ねており、雑誌の刊行にあたり、寺山が中心人物であったことを示しています。

寺山修司が本格的に文学の道歩む出発点、青森高校時代に熱中した俳句であったことは良く知られていますが、この資料からは、中学校時代の寺山修司が、すでに様々な表現形式を用いて多くの作品を書いていたこと、仲間の作品を集め、中心となって編集活動を行っていたことが良くわかります。寺山修司の文学活動の原点を知ることのできる貴重な資料です。



白木茂生誕一〇〇年展に寄せて

鳥井登美子

昨年父白木茂の生誕百年の展示会を開催頂き、心から感謝しております。オランダから来た妹と二人で、初めて青森市を訪れ、じっくり拝見しました。広い会場に沢山の資料と本が並び、本当に立派な展示会でした。父の翻訳本の中には、私どもの知らない本もあり、入手するのも容易でないものもあったと推察されます。妹と「お父さんってこんなに沢山の翻訳をしたのだね。」と感心したのでした。偏に文学館の担当者のお蔭と感謝しております。

父は「本気狂い」とも云える人で、本、特に英米児童図書なら、どこの出版社から何年に出た本か頭に入っていたようで、編集の方々からの問い合わせにすぐ答えていました。趣味は神田神保町の古本屋歩きでした。気に入った本に出会ったときには、上機嫌で帰宅していました。買い求めた本や出版社から毎月送られてくる本で、家は蔵書の山、ほとんど人間が追いやられて、十余部屋あった家でも住めるのは三部屋、それに応接間と父の書斎だけとなりました。最後には庭に倉庫を二棟立てて雑誌を収納していました。その膨大な蔵書の中から突如「〇〇」の本を探せという命令が出るので、明日が学校の期末試験であろうが、本の搜索となるのでした。また原稿を書き終える

と、父はいつも私たち子どもの意見を聞かれましたが、私が受験勉強中のある日、うっかり居眠りをしてしまったところ、いきなり本が飛んできました。父が怒ったのはこのときだけだったと思います。父にとって青森県は故郷でした。生まれは東京でしたが、幼いときに三戸郡に転居し、戦争中は三戸町に疎開したからです。弟と私は三戸で約四年生活しました。今でも三戸の街並みははっきり覚えています。疎開中父は田子の工場で働いていました。以前には大久保康雄氏の弟子として、翻訳を手伝っていました。敵国語の英語は御法度の戦争中は、学から離れていたとばかり思っておりました。けれども今回の展示会で、同人誌などで結構文学活動していたのだと知ることができました。馬場のぼる氏との出会いもこの時期だったようです。

戦争が終結すると父はすぐ東京、家族を呼び寄せる準備に取り掛かりました。そして執筆生活を本格的に始めたのです。同じく三戸から馬場氏も上京、漫画家としてスタートされました。父はまず小学館の雑誌に掲載させて頂きました。やがて講談社の世界名作全集の『ゼンダ城のとりこ』の翻訳を担当、当時の名作全集ブームに乗って、各出版社からの依頼で、全集の企画執筆に精力を注ぎ込みました。執筆活動を始めた頃、父は身体

が弱く独りでは外出ができないほどで、私がいつも付いていました。また私が小学五年生、弟が四年生から独りで小学館や講談社までバスや電車を乗り継いで原稿を届けました。妹が生まれたばかりのため、母は外出できなかったのです。仕事が軌道に乗るに従って、父は元気になり、独りで何処へでも出掛けるようになりました。

父は子ども好きだから子どもの本を書くのだといっていました。六人兄弟の末っ子のため、子どもをどう扱ったらよいかわかっていないようでした。私の息子が生まれた頃は特別関心を示しませんでしたが、幼稚園に入る頃は「おじいちゃん」と慕われるせいか、べた可愛がりをして、私の目を盗んでこっそり連れ出し、くじ引きのウルトラマンのカードを箱ごと一式買いとって持っていました。父は世間一般の常識に欠けていて、子どものまま大人になったようなところもありました。自分の好きなことを仕事とすることができたことは幸いだと思えます。英米の優れた本を一冊でも多く日本の子どもたちに紹介したいという思いで一生を捧げたと思っております。その集大成としてあのような記念展を開いて頂いたことを、きつと父は喜んでることでしよう。

(とりいとみこ・白木茂長女)



法政大学多摩図書館所蔵「白木茂文庫」のコーナー



白木茂の作品「英米文学の名作」、「SF」のコーナー

企画展「白木茂生誕一〇〇年展」開催報告

「白木茂生誕一〇〇年展」を、四月一七日(土)から五月三十日(日)まで開催しました。

翻訳家、児童文学者として活躍した白木茂(一九一〇—一九七七)は、東京都京橋区に生まれますが、まもなく一家が青森県三戸郡向村(現南部町)に転居し、小学生までこの地で育ちました。日本大学英文科在学中より翻訳に従事、戦後は児童文学の翻訳者として活躍し、『少年少女シートン動物記』をはじめ、名作物語・SF・ノンフィクション・伝記等、多彩な児童文学作品を翻訳し、「さながら戦後の日本児童文学史を背負うかの観がある」(『日本児童文学大事典』)と評された人物です。

白木茂の翻訳書は、現物を調査・確認できたものだけで二八二冊を数えます。その中から本展では、当館所蔵の資料に加え、長男の小森洋様、三戸町立図書館ほかの御協力をいただき、入手できた図書二一〇冊をジャンル別に紹介しました。初の児童向け翻訳の単行本『アルプスの少年』、講談社世界名作全集の『ゼンダ城のとりこ』、児童向け翻訳SFの先駆け『少年火星探検隊』などが、その代表的なものです。

また、白木茂は海外の児童文学書の蒐集家としても知られており、旧蔵の洋書約五二〇〇冊が、現在「白木茂文



『シートン動物記』原作の初版本
法政大学多摩図書館蔵

庫』として法政大学多摩図書館に収められています。今回はその中から七十冊をお借りして展示しました。各冊に「白木蔵書」の印が押されたこれらの洋書は、白木自身が訳したり、他の翻訳家や出版社の企画に活用されたりして、日本の子供に紹介されました。なかでも、『シートン動物記』の原作である初版本は、シートン自筆の挿絵が多数収められた貴重なものです。

戦時中の昭和二十年、白木は一家で三戸町に疎開し、約四年間を過ごしました。今回は、当時、白木が三戸で参加した文芸誌「北戸」や川柳誌「銀河」を紹介するとともに、立花昭三様ほかの御協力により、当時の仲間宛の書簡を展示しました。また、この時期に白木は馬場のぼると出会い、上京して漫画家になることを勧めます。馬場歌子夫人からは、二人の長年の交流を示す献辞入りの著書

を寄贈していただきました。白木が三戸を去った後も、当時の仲間との交流が長く続いたことが良くわかります。

会期中には、長男の小森洋様御夫妻、孫の洋平様御夫妻、長女の鳥井登美子様、次女の小森登紀子様にも展示を御覧いただき、家庭でのお仕事ぶりや素顔など貴重なエピソードを伺うことができました。

五月九日(日)には、日曜講座「白木茂人と作品」(文学館主幹・佐々木朋子)を開催しました。また、県立図書館の協力により、五月八日(土)、児童対象の「おはなし会」を企画展示室前のロビーで開催し、「アイウエオの木 絵本の会」のみなさんに『ぼうしをほしがったライオン』『てんぐのめんの宇宙人』など白木作品の読み聞かせをしていただきました。

「子どもの頃夢中で読んだ本がこの方が訳しておられたということを始めで知りました」「このような広範にわたる分野を一人の県人が担い一時代を築いたことを同郷の者として誇らしく思いました」「今の子供達にたくさん読んでほしいです」——来館者のアンケートからも、戦後、白木茂の翻訳作品がいかに多くの人に読まれてきたかを改めて実感しました。今回の展示を契機に、白木茂の業績を一人でも多くの方に知っていただけたならうれしく思います。

(佐々木朋子、青森県近代文学館主幹)

パネル展開催

本年度は特別展「西北五文学散歩」の開催にちなみ、西北五地区の高校を中心に巡回いたしました。会場は以下の通りです。

◇「大宰治生誕一〇〇年」パネル展

太宰の宿ふかうら文学館	6月5日〜27日
金木高等学校	10月20日〜22日
五所川原高等学校	11月10日〜12日
木造高等学校	11月12日〜17日
鶴田高等学校	11月22日〜25日

◇「白木茂生誕一〇〇年」パネル展

三戸町立図書館 7月1日〜3月31日

◇「西北五文学散歩」パネル展

五所川原商業高等学校	10月15日〜18日
金木高等学校	10月18日〜20日
金木高等学校市浦分校	10月20日〜22日
板柳高等学校	10月22日〜25日
五所川原工業高等学校	10月25日〜29日
五所川原農林高等学校	10月29日〜11月1日
中里高等学校	11月1日〜5日
鱒ヶ沢高等学校	11月5日〜8日
五所川原高等学校	11月8日〜10日
木造高等学校	11月10日〜12日
木造高等学校深浦校舎	11月12日〜17日
鶴田高等学校	11月17日〜22日
五所川原第一高等学校	11月22日〜25日

◇「白木茂生誕一〇〇年」パネル展

「西北五文学散歩」パネル展

県総合学校教育センター 1月6日〜13日

竹内俊吉生誕一一〇年展に寄せて

東京で過ごした子供時代、夏休みや冬休みになるたび、家族で青森市浦町にあった祖父・竹内俊吉宅に遊びに行くのが楽しみだった。一九七〇年〇年代前半のことだ。

祖父と祖母・喜美が暮らしていた浦町の家は、木造二階建ての小さな造りで、歩くとミシミシ音がした。玄関横の茶の間は、六、七人座るといっばい。台所の床にはネズミの穴があり、ふるは、まき炊きだった。

当時祖父は青森県知事だったが、祖父宛の荷物の配達に来た人が「知事宅が見つからない」と家の前を往復したこともあった。つまり、お世辞にも立派とは言えない家だったのだが、祖父宅に入るとなぜかいつも懐かしい、ほっとした気持ちになった。

祖父が早く帰宅した日は、祖父を中心に親戚でちやぶだいを囲んで食事をするのが恒例だった（もちろん、ぎゅうぎゅう詰めで）。私の母（三女アツミ）たちは子供のころ、茶の間で祖父のひざに乗ったり、両わきに座って、青森の昔話や「おもしろい話」を聞くのが好きだったという。

私の母は長兄黎一をはじめ三男三女の六人きょうだいで育った。二男・洪は亡くなったが、今もきょうだい五人が集まると、「父さん、母さん」の思い

出話が尽きない。家の中で相撲をとったこと、ライスカレーを食べに街に連れて行ってもらったこと、宿題の作文を代わりに書いてもらったこと――。「戦後の公職追放時など貧しい時期もあったけれど、楽しい子供時代だった」。伯母たちはいつもこう振り返る。

知事在職中に亡くなった祖母・喜美も面倒見が良い人で、だれかが遊びに来るとすぐご飯をふるまい、家庭が貧しくお弁当が持てない子には、そっとおむすびを持たせた。祖父母のことを実の父母のように慕う人たちを見て育った。

祖父は、私にとっても、この上なくやさしいおじいちゃんだった。いつも「おう、おう」と笑顔で迎えてくれ、疲れたり、怒った表情は見たことがない。印象に残っているのは、夜中、書齋で



「海峽」第1回(昭和7年6月18日「東奥日報」夕刊)

村田泉

机に向かつて仕事をしている姿だ。祖父は夕食を済ますと「吾（わ）、寝るじや」といったん床に就き、夜中に再び起きて書齋に入る習慣があった。書齋の本棚には政治経済の専門書や歴史本のほか、詩や文学全集、絵画集などが並んでいた。

企画展では手帳や絵皿など懐かしい品々と再会したほか、祖父の子供のころの写真や新聞連載小説「海峽」掲載紙など初めて目にする資料も多かった。新聞記者、政治家、放送局経営者としての仕事。それらと併行して継続した絵画や俳句などの創作活動――。私にとって祖父

は、活動の幅があまりに広く、多才で、手が届かない存在だと感じることもあった。だが、今回の企画展で、近代文学館の方が綿密に系統立てて、整理してくださった二〇〇点あまりの資料を見ているうち、夢や希望を抱えながら、青森で精一杯、自分なりの道をひらいていった祖父の思いをリアルに、生き生きと感ずることができた。

私も祖父や伯父に続き新聞記者になった。本や文学に親しんで育ったこと、ジャーナリストを志向したこと。より良い社会を目指す政治家の役割を、一定程度ボジティブにとらえている（信じている）こと。私の根もとにも、祖父から受け継いだ何かが息づいているのかもしれない。

大げさな言葉や権威ぶったことを嫌った祖父だ。「泉ちゃんや、そろそろやめるじや」と言う声が聞こえてきそうなので、この辺で終わりにしたい。

祖父のまわりにはいつも、文化活動や仕事を通じ苦楽や夢を分かち合った仲間や熱く温かく支えてくれる青森の人たちがいた。今回多くの方のお力を得て、企画展を開いていただき、祖父もきっと頭をかがいて照れながら感謝していると思う。

最後になりましたが、出品等でご協力いただいた方々、竹浪直人さんをはじめ青森県近代文学館の皆様にご挨拶してあらためて深く感謝の意を捧げます。ありがとうございました。

（むらた泉・竹内俊吉孫）



竹内俊吉肖像(撮影年不明)

企画展「竹内俊吉生誕一一〇年展」開催報告

十月九日(土)から十一月二十一日(日)まで企画展「竹内俊吉生誕一一〇年展」を開催。「東奥日報」記者、ラジオ青森(現在の青森放送)の創設者として本県の文化運動をリードし、昭和三十八年から四期にわたり青森県知事を務めた竹内俊吉の生涯を振り返りました。

開会式には、竹内俊吉の長男黎一氏、長女松本章氏をお招きし、青森放送社長石田稔氏をはじめ大勢の方が見守る中テープカットを行いました。御遺族ならびに関係者の方々の御協力により、盛大な形でオープンを迎えられましたことに改めて感謝申し上げます。



左から松本章氏、竹内黎一氏、黒岩館長

本展では、竹内俊吉の文学活動の業績に光を当てるべく約二百点の資料を公開しました。俊吉の文学活動は少年時代の文芸誌への投稿から始まりますが、日本近代文学館の協力により、作品掲載誌としては最初期のものである「武俠世界」大正六年二月号を展示することができました。この雑誌には俊吉が郷里・出精村(現つがる市木造)の老人から聞いた話を素に描いた怪談「仏間に笑ふ少女の顔」が掲載されています。

大正十四年から昭和十五年まで、「東奥日報」の記者を務めた俊吉ですが、昭和七年には同紙夕刊に連載小説「海峡」を発表しています。本展では「海峡」第一回目掲載の紙面(青森県立図書館蔵)を公開しました。このほか俊吉が手掛けた記事「青森へ来た芥川龍之介」や、新聞小説二作目である「わかれ道」が掲載された「東奥日報」を展示し、ジャーナリストとしての足跡を振り返りました。

大正から昭和初期にかけて俊吉は「黎明」誌上で「母」をはじめ七編の小説を発表しています。また、自ら主唱し実現に漕ぎ着けた県下統一の文芸雑誌「座標」においては二編の小説を発表しました。これらの作品掲載誌を展示するとともに、一部の作品については本文部分のコピーを掲げました。

俊吉は昭和十二年から十四年にかけて二度の従軍を経験しており、この時期

の資料としては従軍記者腕章五点を展示することができました。つがる市教育委員会から出品いただいたもので、普段はつがる市木造中央公民館内の竹内文庫に保管されています。同文庫ではNPO法人つがる野文庫の会の管理により、俊吉旧蔵の図書約三千冊を閲覧することが可能です。今回の企画展では同文庫から腕章のほか、俊吉が昭和四十年代に参加していた茶の間會や俳誌「春燈」に関する資料を多数お借りしました。

俊吉は知事時代も公務の合間には俳句や書画をたしなみ、文化と親しむ姿勢を崩さなかったことが知られています。俳句が書き込まれた日程手帳や「ソ連行日記」は、そのことを物語る資料でした。このほか書画としては「自画像」など絵画三点、「サーカスの馬みな老いて花満開」をはじめ自筆詠句六点を公開しました。俊吉の詠句「人すべてそこぼくの秘事春の雲を棟方志功が個人的に作品化し、俊吉に贈ったという版画軸「琵琶弁天妃の柵」を展示できたことも大きな収穫でした。

今回の企画展を通して、様々な角度から竹内俊吉の素顔を垣間見ることができたように思います。俊吉の命日を翌日に控えた十一月七日には、日曜講座「文人・竹内俊吉」を開催しました。

(竹浪直人、青森県近代文学館主事)



竹内俊吉短冊「海の水にひたれば高き雲の峰」

伊藤比呂美朗読会「午後のリサイタル」

二月十五日、詩人の伊藤比呂美さんをお招きし、企画展示室前において朗読会「午後のリサイタル」を開催しました。青森県立美術館のワークショップのため来青なさった伊藤さんにお願ひし、急遽実現したものです。

当日は、自作の詩五編を朗読していただきました。特に、恐山のイタコ・桜庭スエの「お岩木様一代記」に影響を受けて書かれた詩「わたしはあんじゅひめ子である」、高校時代から大好きな作家だという太宰治に宛てた「太宰治への手紙」は圧巻でした。ほかに「ナシテ、モーネン」、近作『読み解き「般若心経」』から「般若心経」「白骨」(蓮如)を、トークも交え朗読していただきました。当日は七十三名と多くの参加があり、伊藤さんの熱演は大好評を博しました。文学館ホームページから、当日の朗読を動画でご覧いただけます。



「新収蔵資料展 蘭繁之の世界」開催報告

平成二十三年一月十五日から三月十三日までの会期で、「新収蔵資料展 蘭繁之の世界」を開催しました。

蘭繁之は、一九二〇（大正九）年、弘前市和徳町に生まれ、詩人として活動する一方、一九五五（昭和三十）年に「緑の笛豆本の会」を立ちあげ、手作りによる豆本や限定特装本を刊行し続けました。

「緑の笛豆本」は、昭和四十年八月の第一集『竹久夢二の想ひ出』から始まり、三十九年間にわたって第四二三集まで刊行を続け、全国的にその名を知られました。同時に蘭は「美しい本」「鑑賞に耐える本」を目指して手作り限定本の製作に打ち込み、木版画・木綿を基調とした民芸調の装幀をはじめ、革装、銅版・ガラス版、陶板のはめ込み、金箔押しなど、作家や作品に合わせて、様々な手法の特装本を生み出しました。畦地梅太郎、川上澄生、平野威馬雄、また県内出身作家では棟方志功、関野準一郎、今官一、沙和宋一、一戸謙三、鳴海完造など、文学・美術を中心に多くの作家の造本を手がけました。本展では、今回新たに寄贈された蘭繁之の作品および蔵書を中心に、従来の所蔵資料も織り交ぜながら、蘭が生涯にわたって情熱を傾けた豆本・特装本の世界を紹介しました。北海道立文学館・弘前市立郷土文学館からも貴重な資料の御協力をいただきました。



緑の笛豆本のコーナー

三十九年間にわたり手作りで続けられた「緑の笛豆本」全四二三集の展示をはじめ、その前身といえる版画集「緑の笛」全二十集や、蘭の手がけた限定特装本百十六点、そして蘭の貴重な蔵書の中から、「武井武雄刊本作品」「成瀬書房特装本」など、計六百六十五点の資料を展示しました。また、蘭が実際に使っていた製本用具の展示や、豆本の制作過程を紹介するコーナーも設けました。

川村慶子夫人のバネル原稿「ありがとう、楽しかった」は、多くの作家や愛書家と交流しながら、本作りに打ち込んだ蘭との二人三脚との日々を振り返り、蘭の素顔を紹介するものでした。川村氏は一月二十日に来館なさり、展示物をご覧になりながら、毎日朝早くから本造りに没頭していた蘭の思い出や、造本を通じて交流した方々とのエピソードなどを

語ってくださいました。二月六日には「蘭繁之作品の魅力」(文学館・佐々木朋子)「製本への誘い」(図書館・棟方維大)のテーマで日曜講座を開催しました。

(佐々木朋子、青森県近代文学館主幹)



左から川村慶子氏、佐々木主幹

第九回青森県近代文学館川柳大会開催

三月六日、第九回青森県近代文学館川柳大会を青森県立図書館集会所で開催し、八十一名が作品を競いあいました。

今回は、青森市の俳人、高森ましら氏に「川柳に期待すること」というタイトルで講演をお願いしました。

俳句は六十年、川柳は二十年というキヤリアの高森さんが、松尾芭蕉の俳諧を例にあげて解釈しながら、川柳こそ「アソビの文学」、俳句と川柳が分化していなかった芭蕉の時代の連歌を、現代の川柳人にも新しい感覚で研究してもらいたい、とお話しされました。

大会の特選句は次のとおりです。

宿題「早い」村田けん一選
飼い猫が生前葬を銜くわえて来る
神千蔵

宿題「早い」三浦ひとは選
手短に蟻の弔文きざらぎ彼句吾
きざらぎ彼句吾

宿題「結ぶ」尾形せいじ選
枝に結んだ縄に見られているのち
村上秋善

宿題「結ぶ」山野茶花子選
靴ひもキユツ春満タンを浴びに行く
岩崎雪洲

宿題「星」関楚艸太郎選
あの隅でいいから二等星になる
内山孤遊

宿題「星」菊池京選
あの隅でいいから二等星になる
内山孤遊

宿題「帰る」高橋岳水選
荒縄を縛うためだけに子が帰る
千島鉄男

宿題「帰る」工藤青夏選
荒縄を縛うためだけに子が帰る
千島鉄男

席題「蘭繁之展の製本道具」三浦敬光選
足裏の山椒魚が疼き出す
土田雅子

席題「蘭繁之展の製本道具」土田雅子選
生命線を伸ばす小さな本と会う
福井陽雪

資料寄贈者紹介

次の方々から資料を寄贈していただきました。ありがとうございます。ご協力をお願いします。

図書・資料受け入れ報告

平成二十二年三月～二十三年二月

- アイヌ文化振興・研究推進機構 『アイヌ美を求める心』
青木一平 『安倍能成関係史料の全体像(上)』
青森県歌人懇話会 『青森県歌集』第53集
青森県環境生活部県民生活文化課県史編さんグループ 『青森県史 文化財編 美術工芸』
青森県観光連盟 『おももり教育旅行ガイドブック2010』他図書・パンフレット六部
青森県現代俳句協会 『青森県現代俳句年鑑2010年版』二冊
青森県詩人連盟 『二〇一〇年度版原詩集青森』
青森県総合社会教育センター 『学遊トピア おももり2010』二冊
青森県東地域域民局地域連携部 『わたしの「津軽」』
青森県俳句懇話会 『新青森県句集第二十一集』
青森県文芸協会 『人日』他図書・特殊資料二十九点
青森県民文化祭文芸コンクール実行委員会 『文芸コンクール入選作品集20』二冊
青森県立美術館 『芸術の青森』
青森市総務部総務課市史編さん室 『新青森市史資料編8 現代』
青森田中学園 こぶしの花編集委員 『こぶしの花』第76号 他三冊
青森ペンクラブ 『北の邊』第13号 二冊
青森放送 『太宰治、心優しさが強さ 総集編』(DVD)
秋田市立雄和図書館 『秋田市文化シンポジウム事業報告書』

- Ahaus 編集部 『Ahaus』No.9 二冊
阿部誠也 『津川武一ゆかりの地』二部
新谷ひろし 『旅』他図書・雑誌五冊
石井耕 『できるかぎりよき本前編』他一冊
石川近代文学館 『泉鏡花 徳田秋聲 室井犀星資料目録』
石村柳三 『夢幻空華』
市川市文学ブラザー 『生誕一〇〇年 脚本家水木洋子』
市川手児奈文学賞実行委員会 『二〇〇九年市川を詠む』
一戸恵多 『遠い瞳』
一茶記念館 『小林一茶百八十四回忌 全国俳句大会作品集』
逸見フミ 『遠き潮騒』
伊藤宣治 『オールデイズ』
伊藤比呂美 『河原荒草』他二冊
内山啓次郎 野脇中学校文芸部 『白鳥』
NHK出版 放送関連図書編集部 『NHK こだわり人物伝 2010年6-7月』
大阪国際児童文学館 『第26回ニッサン童話と絵本のグランプリ 創作童話・絵本入賞作品』
沖昇 『句集七夕』
尾道てこう座 『三国志』(CD)
学習院大学史料館 『ミュージアム・レター』No.14
葛西千香子 『児文研のあゆみ』
『風花随筆文学賞』実行委員会事務局 『第13回風花随筆文学賞入賞作品集』
角川書店 『大東京四谷怪談』
神奈川文学振興会 『小泉八雲展』他一冊
兼平一子 『おほみづあを』
河北新報社 『河北ウイークリーせんだい』Vol.160
河北文化事業団 『第59回平成21年度河北文化賞』
鎌倉文学館 『高浜虚子 俳句の日々』他一冊
鎌田慧 『人権讀本』
唐振昌 『句集 陶枕』
川村慶子 『手風琴』他図書・雑誌二十三冊
北九州市企画文化局文化振興課 『北九州市子どもノンフィクション文学賞 受賞作品集』
北九州市立文学館 『文学と格差社会』他一冊
北九州市立松本清張記念館 『終わりなき探究』他二冊

- 北国翔子 『北国翔子童話集ギタタン・バック2』三冊
北島一夫 『生涯の歌』
岐阜女子大学 『社会人のためのデジタル・アーキビスト教育プログラム事業報告書』
木村捷則 木村助男関係資料百十七点
木村雅子 『歌集 桃天』
清真人 『三島由紀夫におけるニーチェ』
共和トラベル株式会社 『おももり CHAIR WALKER』二冊
陸羯南会 『陸羯南会誌』第1号
陸羯南生誕百五十年没後百年記念事業実行委員会 『陸羯南生誕百五十年没後百年記念展』他二冊
黒田明 『高木彬光探偵小説選』
群馬県立土屋文明記念文学館 『茨木のり子展』他二冊
小岩尚好 常田健伸他六人
黄河陽子 『詩集 耳を澄ます』二冊
高知県立文学館 『吉井勇没後五〇年展』
江東区砂町文化センター 『第9回石田波郷記念「よこべら」俳句大会句集』
『こおりやま文学の森資料館』『田中冬二展』他二冊
古河文学館 『沖ななも展』
国立教育政策研究所 社会教育実践研究センター 『平成21年度 博物館に関する基礎資料』
小林徳男 『吾一 第貳号』
小森洋一 『ヒマラヤの伝書ばと』他白木茂関係資料七十六点
小森洋平 『アジアの秘境探検記』他九冊
小諸市教育委員会 『第十六回 小諸・藤村文学賞入選作品集』
今公恵 『今官一 関係特殊資料三十四点』
さいたま文学館 『森は海の恋人』他二冊
斎藤梢 『貨物船』
齋藤茂吉記念館 『齋藤茂吉記念歌集 第二十六集』
堺市立文化館与謝野晶子文芸館 『塚発与謝野晶子』
坂の上の雲ミュージアム 『新聞「日本」と子規』
嵯峨牧子 『星座の怪人』
桜井冬樹 『心ぐらしの歌』
桜庭和浩 『主婦之友』第26巻第4号 他五冊
佐々木高雄 『雪國の春』他図書・雑誌十二冊

- 佐々木達司 短冊他特殊資料十五点
佐々木靖章 『学友会雑誌』第2號 他八冊
『さんかの会』(1995-2010) 50th Anniversary 第33回群馬県文学賞受賞者作品集』
佐藤勇治 『おももり草子』通巻196号
嶋祐三 『資料集「青森県近代文学館年表」を読む』
下北文化編集委員会 『しもきた文化』第44号 一冊
周南市文化振興財団 『まど・みちお』を語る記録集』二冊
情野千里 『川柳句集 百大夫』
昭和館 『伝えておきたい昭和のくらし』他パンフレット十部
新思潮 『現代川柳新思潮合同句集』
水星舎 『アトランチスノート』1
鈴木喜代春 原稿 『モンゴルに米ができた』他二点
清野美智子 『こぶしの花』
世田谷文学館 『森鷗外と娘たち』
仙台文学館 『太宰治展』他一冊
川内まこころ文学館 『総合雑誌「改造」直筆原稿収蔵図録3』
川柳 あおの塔 『あおの塔』第46号 他図書一冊
川柳塔社 『麻生路郎讀本』
創童社 『白い国の詩』通巻609号 他一冊
高木大麓 『こども家の光』
高木達一 『石阿弥道稿集「病中日記」補訂』(CD)
節のふるさと文化づくり協議会 『土のふるさと』
高橋玖末子 『詩集 夢虫』他図書・雑誌三冊
高橋紀子 『歌集 山姥 補遺』
高島寛 『コンドルは飛んで行く』
高原巳佳 『長篇小説全集2 石坂洋次郎篇』
高山市役所 生涯学習課 『平成二十一年度高山市近代文学館調査・研究報告書』
竹浪和夫 『評伝 鳴海要吉』二冊
『太宰治スタディーズ』の会 『太宰治スタディーズ』第3号
館将久 『白神に舞う』他三冊
田中義昭 『峽』第2号 他四冊
田辺聖子文学館 『第2回田辺聖子文学館ジュニア文学賞受賞作品集』

- 田原市博物館―『杉浦明平の世界』
- 調布市武者小路実篤記念館―『白樺派と漱石』他一冊
- 津川武一生涯100年記念事業実行委員会―『津川武一生涯100年記念誌』他パンフレット一部
- 対馬正子―『詩集 ほしの樹紋』
- 辻桃子―『第2回手島右卿賞受賞 辻桃子作品集』二冊
- 常田健 土蔵のアトリエ美術館―『大地の絵筆 常田健』
- 津幡ひろ子―『近代文学』第1巻第1号他雑誌・特殊資料四十七点
- 鶴岡市立藤沢周平記念館―『春秋山伏記』と庄内』他二冊
- 東奥日報社―『TOO Life』第41号 他五冊
- 東京都江戸東京博物館―『東京都江戸東京博物館資料目録 動物編(ネコ)』
- 藤樹社―『書道界』第23号第3巻
- 徳島県立文学書道館―『川柳作家 時美新子展』他三冊
- 読書人―『週刊読書人』第 八六一号 他一冊
- 鳥羽市教育委員会―『旧伊良子清白家住宅 兼診療所移築保存工事報告』
- 中村節雄―句軸他図書・特殊資料七点
- 中村稔―『文学館を考える』
- 成田市子―『俳句は欲びの文学』
- 成田本店―『波』十二冊 、『図書』『青春と読書』各十三冊 計二十八冊
- 新潟絹子―『新岡みつ短歌集』一冊
- 新潟県立歴史博物館―『日本海の至宝』他一冊
- 新美南吉記念館―『第21回新美南吉童話賞 入選作品集 赤いろそく』
- 西村由美子―『今官一関係特殊資料三十四点』
- 日本近代文学館―『日本近代文学館年誌 資料探索6』
- 日本現代詩歌文学館―『啄木に献ずる詩歌』
- 日本ネパール文化交流・ナマステ会―『花束 第VI集 日本・ネパール合同詩集』
- 練馬区文化振興協会―『五味康祐の世界』
- 野沢省悟―『LONG STORY』
- 野田頭照子―『歌集 楳田の風』
- 長谷川孝典―『あおもりほうそう』No.1 他二十五冊
- 畑中健二―『三木清―板垣直子の剽物論争とその周辺』

- 畑中とほる―『俳句で綴ったあの日あの頃』二冊
- はな短歌会青森支部―『第二合同歌文集』
- 馬場歌子―『トム・ソウヤーの空中旅行』他四冊
- 萬緑青森支部―『岩木吟』二冊
- 姫路文学館―『和辻哲郎展―しめやかな激情―』他二冊
- 兵頭勉―『青嵐』
- 平野敏―『詩集 花さかり』
- 弘前市立図書館―『弘前図書館蔵書目録 松木文庫の部』他一冊
- 弘前川柳社―『川柳弘前』No.508
- フイラーズステーション―『ふい〜らあ』第21巻第1号
- 福岡市文学館―『壇と眞鍋』
- 福田正夫詩の会―『音』
- 福地順―『津軽抄』
- ふくやま文学館―『井伏鱒二のへまげもの』I』他二冊
- 文の京文芸賞実行委員会事務局―『薤の鈴虫』
- 帆船美術館―『美術歳時記』
- 星野富一郎―『句集 あしあと』他一冊
- 北海道開拓の村―『北の開拓物語』(DVD)
- 北海道立文学館―『三浦綾子 いのちへの愛』他図書・雑誌・リーフレット五部
- 前多喜雄―『つゆくさ抄』他図書一冊
- 前橋文学館―『松浦寿輝』他二冊
- 町田市民文学館ことばらんど―『随筆家白洲正子』
- 松井ひろ子―『水光る湖』
- 松山市立子規記念博物館―『子規 明治を駆ける』
- 圓子哲雄―『短編小説 遠い音』
- 三上強二―『太宰治と私』他図書・雑誌四百七十一冊
- 岬の分教場保存会―『第八回 二二十四の瞳 文壇エンゼル募集 受賞者作品集』
- 三鷹市山本有三記念館―『波』他一冊
- 天津きみ―『ブラキストン線』二冊
- 宮崎潤―『群馬の文学・思想・教育』第5号
- 宮崎靖士―『日本文学』第59巻第4号
- 椋鳩十文学記念館―『全国読書感想文入賞作品集』
- 村上秋善―『風と稲』

- 森英一―『維新の暈』
- 安田保民―『上北文学』第2号 他二冊
- 焼津小泉八雲記念館―『第19回(平成21年度)小泉八雲顕彰文芸作品コンクール入選作品集』
- 山浦誠―三浦哲郎原稿他二点
- 山口馨―『風景』
- 山田春雄―『ふるさと―私を育ててくれた津軽』
- 山梨県立文学館―『井伏鱒二と飯田龍太』他一冊
- やまなし文学賞実行委員会―『恩寵』
- 吉田千嘉子―『枕雛子』二冊
- レマン『大人の休日』編集部―『大人の休日 倶楽部ジバンク』第4巻第1号
- 渡部ヨシ子―『考証子規と松山』他雑誌一冊
- 青嶺俳句会―『青嶺』
- 青森アララギ会―『青森アララギ』
- あおもり草子編集部―『あおもり草子』
- 青森県教育厚生会―『三潮』
- 青森県川柳社―川柳誌「ねぶた」
- 青森県長寿社会振興センター―『あおもり長寿セミナー』『あすなる倶楽部』
- 青森県文芸協会―『文芸あおもり』
- 青森県歩道短歌会―『北潮』
- 青森古今短歌会事務局―歌誌『青森古今』
- 青森美術音楽鑑賞会―『A B O K』
- あしかげ社―『蘆光』
- 尼崎芸術文化協会―『芸文あまがさき』
- 新谷ひろし―『雪天』
- 石川近代文学館―『鏡花研究』
- 井上靖研究会―『井上靖研究』
- 大阪国際児童文学館―『国際児童文学館紀要』
- 大佛次郎記念館―『おさらぎ遺書』
- 鬼發行所―『鬼』
- 小山正見―『感泣亭秋報』
- 海光發行所―『詩誌「海光」』
- 飾面の会―『飾面』
- 風詩社―『詩誌「風」』
- 金沢文化振興財団―『研究紀要』
- 川内俳句会―『ひこげえ』
- 菊池寛記念館―『文藝もず』

定期刊行物(平成二十二年度分)

- 北の会―『きたのやかた』
- 北の街社―『北の街』
- 国原社―『歌誌「国原」』
- 黒艦隊―『俳誌「黒艦隊」』
- 群系の会―『群系』
- 薫風發行所―『俳誌「薫風」』
- 群馬県立土屋文明記念文学館―『風』文学紀要2010』
- 群緑短歌会―『群緑』
- 勁草社―『勁草』
- 月刊弘前編集室―『月刊弘前』
- 現代文学史研究所―『現代文学史研究』
- 越谷市立図書館 野口富士男文庫―『野口富士男文庫』
- 朔社―『詩誌「朔」』
- 此岸俳句会―『俳誌「此岸」』
- シモノー [Fishing Gate]
- 紫明の会―『紫明』
- 下関短期大学―『下関短期大学紀要』
- 渋柿園俳句会―『俳誌「渋柿園」』
- 樹水群發行所―『俳誌「樹水群」』
- 昭和館―『昭和のくらし研究』
- 書肆 青柳社―『誌と創造』
- 書肆 北奥舎―『北奥氣圏』
- 真朱の会―『真朱』
- 全国文学館協議会事務局―『全国文学館協議会紀要』
- 川柳触光舎―『触光』
- 川柳ゼミ 青い実の会―『青い実』
- 川柳塔みちのく―川柳誌「川柳塔みちのく」
- 川柳ひらなひら社―川柳誌「川柳ひらなひら」
- 外海吟社―『外海』
- 高田寄生木―川柳誌「北貌」
- たかなな發行所―『俳誌「たかなな」』
- 千田和美―川柳誌「風紋」
- 潮音社―『潮音』
- 調布市武者小路実篤記念館―『解説シート』もつと知りたい武者小路実篤』
- 帝國芸術新聞社―『帝國芸術新聞』
- 東京都江戸東京博物館―『東京都江戸東京博物館研究報告』
- 徳島県立文学書道館―『文芸とくしま』『徳島県立文学書道館研究紀要 水脈』
- 豊橋市文化市民部文化課―『丸山薫ランブの灯りに集う』
- 豊巻つくし―川柳誌「うまこい」

- 十和田かばちえつぽ川柳吟社―「川柳かばちえつぽ」
- 波詩社―「波」
- 新潟県立歴史博物館―「新潟県立歴史博物館研究紀要」
- 新美南吉記念館―「研究紀要」
- 日本現代詩歌文学館―「研究紀要」「日本現代詩歌研究」
- 日本民主主義文学会弘前支部―「弘前民主文学」
- 梅光学院大学―「梅光芸文」
- 俳人協会―「俳句文学館紀要」
- Arahomado―「本のパーキング」
- 八甲田川柳社―「川柳八甲田」
- 波止場の会―「波止場」
- はまなす発行所―「はまなす」
- 萬緑青森県支部―「俳誌」「未来」
- 萬緑発行所―「萬緑」
- 姫路文学館―「姫路文学館紀要」
- ひら川吟社―「俳誌「ひら川」」
- 平野敏―「平野敏詩誌「魚信旗」」
- 弘前詩塾―「弘前詩塾」
- 弘前川柳社―「川柳誌」「川柳林檎」
- 弘前大学国語国文学会―「弘前大学国語国文学」
- 弘前潮音会―「短歌誌「すべーす」」
- 弘前文学学校―「文学いちば」
- 弘前文芸協会―「文芸弘前」
- 弘前ペンクラブ事務局―「弘前ペンクラブニュース」
- 福井―「ム」
- 福田正夫詩の会―「焰」
- 藤田晴央―「孔雀船」
- ふだん記津軽グループ―「ふだん記津軽」
- 文化環境研究所―「Cultivate」
- 文藝軌道の会―「文藝軌道」
- 文芸誌「風の森編集室」―「風の森」
- 文団・遙―「遙」
- 帆船美術館―「風」
- 北狄社―「北狄」
- 本郷七日会―「俳誌「地塩」」
- 前橋文学館―「前橋文学館研究紀要」
- 松丘保養園慰安会―「甲田の裾」
- 松本皎―「養笠亭・愚庵・古道入研究」
- 湊川神社社務所―「湊川」
- 無名群社―「無名群」

- 「群山」青森短歌会―「朔天」
- 明治大学芸員養成課程
―「MUSEUM STUDY」
- 安田保民―「個」
- 山田尚―「亜土 第二次」
- 山梨県立文学館―「紀要「資料と研究」」
- 悠短歌会―「悠」
- 機俳句会―「機」
- 吉田健治―「短詩サロン」
- 若菜の会―「若菜」
- 早稲田システム開発―「社内研修資料」
- 青森県総合社会教育センター―「所報響」
- 尼崎芸術文化協会―「芸文だより」
- 石川近代文学館―「石川近代文学館ニュース」
- 石坂洋次郎文学記念館―「石坂洋次郎文学記念館新聞」
- 泉鏡花記念館―「鏡花雪うさぎ」
- 一茶記念館―「一茶記念館だより」
- 井上靖記念館―「井上靖記念館報」
- 岩手県立埋蔵文化財センター―「わらびて」
- 大阪国際児童文学館―「国際児童文学館REPORT」
- 大島博光記念館―「大島博光記念館ニュース」
- 大原富枝研究会―「山査子」
- 科学研究費補助金プロジェクト「昭和文学の結節点としての福永武彦―古事記からヌーヴォロマンまで」―「年報 福永武彦の世界」
- かごしま近代文学館 かごしまメルヘン館―「かごしま近代文学館・メルヘン館報」二年報（平成21年度）
- 神奈川文学振興会―「神奈川近代文学館」神奈川近代文学館年報2009年（平成21年度）
- 金沢文芸館―「さんざの」
- 軽井沢高原文庫―「軽井沢高原文庫通信」
- 北九州市立松本清張記念館―「松本清張記念館報」
- 虚子記念文学館―「虚子記念文学館報」
- 熊本近代文学館―「熊本近代文学館報」
- 高知県立文学館―「高知県立文学館ニュース 藤並の森」

- こおりやま文学の森資料館―「こおりやま文学の森通信」
- さいたま文学館―「館報」
- 埼玉文芸家集団―「埼玉文芸家集団会報」
- 坂の上の雲ミュージアム―「坂の上のミュージアム通信 小日本」
- 佐藤春夫記念館―「佐藤春夫記念館だより」
- 昭和館―「昭和館報」
- 白鳥有吾研究会事務局―「白鳥有吾研究会会報」
- 世田谷文学館―「世田谷文学館ニュース」
- 全国文学館協議会事務局―「全国文学館協議会会報」
- 仙台文学館―「仙台文学館ニュース」「仙台文学館年報」
- 台東区立中央図書館 池波正太郎記念文庫―「池波正太郎記念文庫報」
- 鷹山宇一記念美術館友の会―「七戸町立鷹山宇一記念美術館友の会会報」
- 立原道造記念館―「立原道造記念館」
- 調布市武者小路実篤記念館―「館報 美愛真」
- 壺井栄文学館―「壺井栄文学館だより」
- 東京都江戸東京博物館―「江戸東京博物館NEWS」
- 藤村記念館―「藤村記念館だより」
- 東北大学史料館―「東北大学史料館だより」
- 東北大学総合芸術博物館―「ニュースレター Omnivarians」
- 徳島県立文学書道館―「徳島県立文学書道館ニュース」このは」
- 十和田市立新渡戸記念館―「十和田市立新渡戸記念館だより」
- 中原中也記念館―「中原中也記念館館報」
- 新美南吉生誕100年記念事業検討委員会―「新美南吉生誕100年通信」
- 日本近代文学館―「日本近代文学館」
- 日本現代詩歌文学館―「日本現代詩歌文学館報 詩歌の森」
- 日本新聞教育文化財団―「NIEニュース」
- 日本ユネスコ協会連盟―「世界遺産年報2011」
- 俳人協会―「俳句文学館」
- 原阿佐緒記念館―「原阿佐緒記念館だより」
- 姫路文学館―「手帖 姫路文学館」
- 姫路文学館年報（平成21年度）

- 弘前市立郷土文学館―「北の文脈ニュース」
- 福岡市文学館―「文学館倶楽部」
- 文化環境研究所―「文環研レポート」
- 北海道立文学館―「北海道文学館報」「平成20年度年報」
- 前橋文学館―「前橋文学館報」
- 松山市立子規記念博物館―「子規博だより」
- 松山市立子規記念博物館年報
- 三浦綾子記念文学館―「みほんりん 三浦綾子記念文学館館報」
- 三鷹市山本有三記念館―「三鷹市山本有三記念館報」
- 棟方志功記念館―「棟方志功記念館だより」
- 室蘭文学館の会―「むろらん港の文学館通信」
- 明治大学芸員養成課程
―「年報 MUSEOLOGIST」
- 盛岡てがみ館―「平成21年度 盛岡てがみ館館報」
- 山梨県立文学館―「山梨県立文学館館報」「山梨県立文学館年報（平成20年度）」
- 吉川英治記念館―「草思堂だより」
- 早稲田システム開発―「MAPS Press」
(敬称略)

ギャラリートーク実施

青森県近代文学館の常設展示作家三人とその作品について、文学館解説員によるギャラリートークを実施しました。開催日とテーマは以下の通りです。

- ① 10月30日 石坂洋次郎『何処へ』
② 11月6日 三浦哲郎『拳銃と十五の短篇』
③ 11月13日 葛西善蔵『権の若葉』
④ 11月20日 北島八穂『鬼を飼うゴロ』
⑤ 12月4日 佐藤紅緑『少年行進曲』
⑥ 12月11日 寺山修司『われに五月を』
⑦ 12月18日 長部日出雄『津軽から飛んだ』
⑧ 1月22日 今 官一『牛飼いの座』
⑨ 1月29日 秋田雨雀『幻影と夜曲』
⑩ 2月19日 太宰 治『正義と微笑』
⑪ 2月26日 高木恭造『まるめろ』
⑫ 3月5日 北村小松『船底の秘密』
⑬ 3月12日 福土幸次郎『展望』



ギャラリートークの様子

今月の作家コーナー



和田山蘭の歌集、直筆資料

平成二十二年七月より、これまで作家の資料を一点ずつ展示していた、常設展示室のジャンル別三十三人の作家のコーナー（ガラスケース二個分）をリニューアル。同一作家に関する資料をある程度まとめて展示し、活動の全体像に迫る月替わりのスペースとしました。これまで実施したテーマは以下の通りです。

- 7月 板垣直子、菊谷栄
8月 津川武一と棟方志功、和田山蘭
9月 追悼・三浦哲郎
10月 寺山修司、淡谷悠蔵
11月 江渡狄嶺、増田手古奈
12月 陸羯南と素晴しき仲間たち、岩谷山梔子
1月 鈴木喜代春、中村泰山
2月 高木彬光の時代小説、一戸謙三
3月 佐々木千之、小林不浪人
展示内容や各作家の略歴については、当館ホームページ上で見ることが可能です。

館務日誌

- 4月17日 企画展「白木茂生誕一〇〇年展」開会
4月26日 工藤貴子氏（鳴海完造長女）来館
4月30日 小森洋氏（白木茂長男）来館
5月2日 立花昭三氏（白木展協力者）来館
5月9日 白木茂展日曜講座（佐々木主幹）
5月11日 青森中央短期大学附属第一幼稚園50名見学
5月18日 浦町保育園45名見学
5月23日 特殊資料燻蒸、27日
5月28日 鳥井登美子氏（白木茂長女）、小森登紀子氏（白木茂次女）来館
6月3日 教育委員会平成21・22年度新規採用職員23名見学
6月6日 高木晶子氏（高木彬光長女）、山前譲氏、高木彬光ファンクラブ11名来館
6月8日 退公連上十三支部十和田市分会、教育厚生会上十三支部退職互助会南地区一行45名見学、中泊町教育委員会青森大学37名見学
6月15日 沖館小学校9名見学
6月16日 文学資料調査員会議
6月17日 初任者研修受講者18名見学
6月22日 青森中央短期大学附属第一幼稚園37名見学
6月30日 今別町立今別小学校34名見学
6月30日 鹿角市立立山文庫継承十和田図書館古典読書講座野外学習会19名見学、鎌田慧氏、斉藤光政氏、前田哲夫氏、増子義久氏来館
7月5日 高等学校図書委員研修大会60名見学
7月10日 特別展「西北五文学散歩」開会式（テーブルカット）井上諭一氏、泉谷明氏、来賓 木村捷則氏（木村助男甥）、サトウウジ氏、清野暢邦氏、高橋幸江氏ほか
7月12日 まちく観光ガイド19名見学
7月13日 平川市図書館文学散歩青森県（深浦佐々木主幹）
7月21日 文学館評議委員会
7月25日 特別展「デザインングカラー」ジュ十和田大学61名見学
7月27日 北斗高校通信制課程22名見学
7月28日 八戸市あすなろマスターカレッジ講座（羽仁もと子、佐々木主幹）
8月3日 八戸市あすなろマスターカレッジ講座（羽仁もと子、佐々木主幹）
8月5日 板柳町子ども司書養成講座14名見学
8月8日 第一回文学講座（辻桃子氏、高橋玖未子氏）
8月10日 八戸市あすなろマスターカレッジ講座（白木茂）（佐々木主幹）
8月13日 和合亮一氏来館
8月22日 特別展日曜講座（飛内室長）
8月29日 第二回文学講座（井上諭一氏、木下巽氏）
8月31日 青森市立三内小学校84名見学、沖館中学校4名見学、笹文代氏（和田山蘭孫）来館
9月1日 国語科コンピュータ講座19名見学、中村節雄氏、櫻庭利弘氏、佐々木達司氏（特別展協力者）来館
9月2日 大鰐町立大鰐小学校38名見学
9月5日 浪打病院12名見学
9月7日 北海道立文学館14名見学
9月9日 青森市観光インシエネ6名見学
9月14日 青森市立新城小学校58名見学
9月29日 内山啓次郎、京子夫妻、久慈きみ代氏来館
10月9日 企画展「竹内俊吉生誕一〇〇年展」開会式（一フカト）竹内黎一氏、松本章氏、来賓 村田アツミ氏（竹内俊吉三女）、竹内一志氏（竹内俊吉三男）ほか
10月16日 梅内美華子氏来館、五所川原図書館18名見学
10月20日 弘前地区教職員50名見学
10月21日 岩手県立図書館60名見学
10月25日 日赤奉仕団ががる市稲垣分団30名見学
10月26日 中央文化保育園21名見学
11月7日 竹内俊吉展日曜講座（竹浪主事）
11月11日 平内町立山口小学校18名見学、船水不二也氏（船水公明次男）来館
11月13日 鹿内博青森市長来館
11月17日 青森中央短期大学9名見学
11月18日 鶴岡町立大学38名見学、木造老人クラブ20名見学、図書館協議会総務情報部会（群馬県竹浪主事）
11月19日 全国文学館協議会総務情報部会（群馬県竹浪主事）
11月20日 岩淵紅樹氏（竹内俊吉次女）、村田泉氏（竹内俊吉孫）来館
11月21日 竹内一志子氏（竹内俊吉次男、洪夫人）、竹内黎一氏来館
11月24日 青森中央学院大学講座「津軽を愛した児童文学作家」北島八穂（佐々木主幹）
11月29日 吉田架千子氏（今日出海二女）来館
12月3日 青森中央高校11名見学
12月15日 新収蔵資料展「蘭繁との世界」開催
1月15日 川村慶子氏（蘭繁之夫人）来館
1月20日 藤次次男氏、藤寿々夢氏、館田勝弘氏、齋藤三千政氏、世良啓氏来館
2月6日 新収蔵資料展日曜講座（佐々木主幹・棟方維大青森県立図書館主幹）
2月15日 伊藤比呂美 詩の朗読会（午後のリサイタル）
3月6日 第九回青森県近代文学館川柳大会

青森県近代文学館報 第二十八号

発行日 平成二十三年三月十八日

編集発行 青森県近代文学館

〒030-0184 青森市荒川字藤戸二一九七

電話 〇一七三九一五七五

http://www.plib.pref.aomori.lg.jp/top/museum/